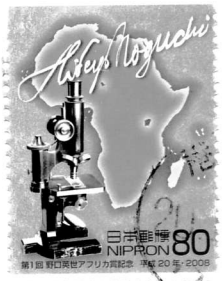
036-8222

~~弘前~~



松橋

立花

弘前市

桜木

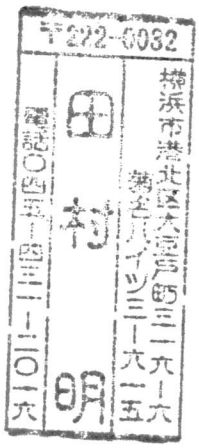
10

15

101

田村　明

２２２－００３２
横浜市港北区大豆戸町３１６－６
菊名ハイツ３－３１５



大学の市民的社会的責務をお送り頂き、誠にありがとうございます。大学の教師になった人々には「主張を書け」とよく言っていたのですが、立派な主張ができるようになるのは、2年半はかかります。私は「市民の社会的責務」を主張していますのですが、その市民の政治は、基礎にエゴ二元論が問題です。最近は、公共家族を考えるべきだと思っています。教師の仕事は「女教育」という社会変革が全く抜け

東京・九善堂

なくなって、私のマンションにアレンジになり果てて
いる姿をみてます。
家庭――地域社会――市民の社会という
ものは構造が必要なのでしょう。
私がずっと過ごしたが、私はこの4月5
月には鬱、血圧、心臓で好急入院。なんと
体重が15キロ、腰の容貌が変ってしまいました。
家から歩いて5、6分の所にやっとこさ。一
ヶ月ぶりでもどってきました。それでも毎月の

東京・九段会

まちがいなく 郵便局 東京、横浜で 続けています。皆
は春 即市まで 因縁で講演に行ってきました
どこまでできるかわかりませんが、何をかやっていい
ます。
来年は弘前城の桜でもみたいものだと考え
始めているのです。これからもお元気で。
十一月二日 田村明

松橋 立様

PS. 私のお酒用紙しておきます

東京の九条会

世界不思議紀行⑯
ミズーリ号

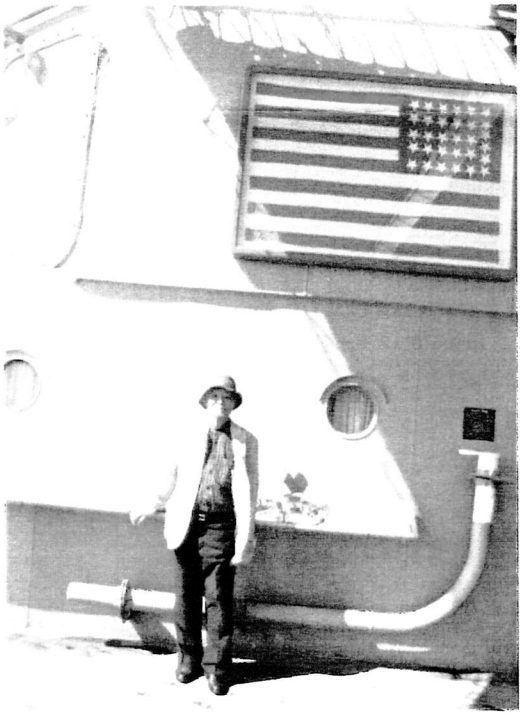
田村　明

ハワイには山ほど日本人が行く。そこで日本の真珠湾攻撃で撃沈された戦艦アリゾナの慰霊碑は、沈んだ戦艦をそのままに、中にいる1200人の遺体もそのままにして、その上に造られた慰霊碑だが日本人にとっては複雑な思いの場所だ。訪れた人も多いだろう。さらに2001年1月から、その近くに戦艦ミズーリ号が博物館として一般公開された。

いま、ミズーリ号を知っている人がどれくらいいるだろうか。1945年9月2日に、この艦上で日本が正式に降伏文書に調印した。日本の政府代表として重光外務大臣と、軍を代表する梅津参謀総長、相手は連合軍総司令官マッカーサー元帥以下連合軍代表である。これで戦争は正式に終わり、それ以降の日本は一度も戦争をしたことがない平和の国になった。

ミズーリ号からアリゾナメモリアルをのぞむ

降伏した場所だと嫌う人もいるが、戦争が続いていたら、私も本土決戦で死んでいただろう。ここから苦難の中に戦後の日本の民主主義が始まり、繁栄を謳歌できた出発点だった。調印式には1853年にペリーが日本を鎖国から解き放つ日米和親条約を締結したときに掲げた国旗を持ってきている。日本の二度目の開国というつもりである。



ミズーリ艦上　ペリー来航のときの旗

ミズーリ号は全長は270m、満載時排水量58000トン。1944年6月に就航したアメリカ最期の戦艦で、それ以降戦艦は建造されていない。金ばかりかかって役にたたないからだ。その例は日本の大和、武蔵。大和は日米開戦直後の41年12月、武蔵は42年8月に竣工している。全長は少し短く263mだが、満載時排水量は69900トンと大きく上回る。主砲の口径がミズーリ40センチに対して46センチで当時の常識を破るものだった。しかし、時代は既に大艦巨砲ではなく、真珠湾攻撃で日本が実証したように航空機時代になっていた。大和・武蔵は実践では用を成さないままに撃沈された。

ミズーリ号の右舷後方に1944年4月の沖縄戦で、神風特攻隊の攻撃を受けた傷跡が残っている。ゼロ戦の特攻機は不発で後方の海に落ちたが、燃料が燃えて後部甲板が一瞬にして火に包まれた。消火活動で消し止められ、米軍の被害はなかった。焼け焦げたパイロットの死体は海上から引き上げられた。ウイリアム・キャラハン艦長は、これを星条旗に日の丸を描かせて包み、礼砲5発、全員敬礼して礼式にのっとった水葬を行なった。「つい先刻、我々を殺そうとして来た敵兵にそんなことをする必要はない」と言う反対もあったが、「敵兵とはいえ、死んだら敵ではない。彼も祖国のために戦った英雄だ。手厚く葬ってやりたい。これは艦長の意志である」と艦内放送をしたという。艦長の兄はこの戦争ですでに戦死していた。艦長の行動は敵味方を越えた人間の尊厳に対する深い敬意と愛情に基づくものだろう。特攻隊を企画して実行させた日本の軍人たちの、目的のためには味方を含めて人間性を無視してよいという人間観とは全く対称的なものが感ぜられる。

世界不思議紀行⑰
ワイキキビーチのこども

田村　明

常夏の国ハワイも、十二月、一月、二月は雨季で結構寒い日もあるし、嵐が来ることもある。ホノルルで三十年ぶりの嵐にぶつかり、ホテルのバルコニーに置いてあった鉄パイプの小テーブルがひっくりかえるほどの強風に見舞われ、停電にもなった。それでも、陽が照れば、ワイキキの浜には数は少ないが甲羅干しのカップルもいる。サーフィンを試みて沖合いまで出てゆく若者たちは、数は少ないが嵐でも平気だ。

ワイキキビーチも昔に比べるとずいぶん砂浜の幅が減った。海流で砂が流されるので、流砂を防ぐ突堤を出したり、一部では前面の波の力を和らげるため防波堤で囲っている。完全に波が来ないのでは意味が無いから低い防波堤で、波はそれを越えて和らげられて浜にやってくる。だから、この浜では子供も海に入ることができる。

強風の翌日の午前は人影も少ない。この安全な浜辺に母親と男の子二人、それにお爺さんの四人連れが遊んでいた。こどもたちは上がやっと小学校に上がり、下はまだ学齢前という感じだ。お爺さんは海に入っているが、母親は砂浜でひなたぼっこ、そのそばで二人の子は砂を掘ったりして遊んでいた。暫くして、お爺さんがこどもを呼びに来た。海に入って立てないようなところで水泳の訓練。一家団欒のほほえましい風景だ。子供も浜に上がってきて、赤い銀紙のキャンディを食べている。水泳で疲れたのだろう。見ていると、突然に小さいほうの子がこちらに向かって走りだした。

何事かと思ったら、キャンディを剥いた銀紙が風に飛ばされたのを追ってきたのだ。昨日の強風の続きで、今日も風はかなり強い。子供が銀紙に追いつきそうになると、また風に飛ばされて転がって行く。何度も掴み損なっては追ってきて、とうとう浜辺と道路の境の1メートルほどの高さの壁際まで追っかけてやっと銀紙を掴まえた。

こどもは、その低い壁を攀じ登って、道路においてあるゴミ箱にぽいと捨てた。あれだけ一生懸命に銀紙を追いかけてきたのは、銀紙が欲しいからではなく、ゴミを散らさないために、自分の責任で始末しようということだったのだ。

別に誰に言われたからでもなく、はじけるようにして銀紙を追ってきた子供はまだ学校前だが、ちゃんと環境に対する躾ができている。風に飛ばされたのだから仕方がないというのではなく、最後まで責任を果たそうとしていたのだ。そんな難しいことを考えたわけでもなく、飛ばされたゴミを自然に追って行っただけだろう。だが、その様子を見ていると、日本の子供たちの教育は何をしてきたのだろうかと思わないわけにはゆかない。

「まち」を美しくするのは、大人が声を張り上げることではなく、こどものときから、こんな身近なことから始まるのだろう。それが大人の市民になる。